



大分県指定無形民俗文化財

諸田山神社御田植祭



諸田山神社御田植祭

諸田山神社御田植祭は、国東市安岐町明治の諸田地区に伝わる伝統行事です。地区の山神社の境内を水田に見立て、神前で田植え神事を行います。

・諸田山神社

諸田山神社がいつ創立されたかはわかっていませんが、諸田飛騨守という人物が土地を選び、社殿を建て、大山祇命などの神々を祀って「山王宮」と名づけ、諸田地域の産土神（土地の守護神）としたと伝えられています。

・御田植祭

御田植祭は昔から全国的に行われてきた農耕儀礼です。形態は様々ですが、多くはその年の豊作を願う行事から発達した神事芸能として行われるようになったと考えられています。

諸田地区の御田植祭は、文政4年（1821）諸田村七兵衛と末広七郎右衛門が奈狩江村（現杵築市奈多）の奈多八幡神社の御田植祭の方法を伝えたことに始まるといわれ、五穀豊穡と氏子繁栄を祈願して毎年行われてきました。祭式は当時の農業の姿をそのまま伝承しており、諸役の服装や言葉などもそのまま伝わっています。そのため、神事の台詞には今では意味のわからなくなっている言葉もあります。

現在は毎年春分の日に行われていますが、以前は旧暦の正月15日に開催されていました。祭りの約一週間前の旧正月6日に祭りの諸役を決める「役付け」をしました。江戸時代には庄屋・弁指・組頭が、現在は区長・組長・会計など諸田区の役員や総代などが集まり、役付けを決めています。また以前は地区を上・中・下の3組に分け、毎年交代で一つの組が神元として祭りの世話役を務め、的打の的と矢の製作や、重役と呼ばれる作庄屋・立人・ウナリの三役を出す役目を担いました。また、世襲で田神主の役を出す家も決まっていました。そして親族に不幸があれば四十九日の法要が済むまでは役付けに決まっていたと女性に触れてはいけなかった、下肥は扱わないなどの厳格な禁忌が決められていました。

現在では地区の人口が少なくなっているため、必ずしも神元から重役が選ばれるようにはなっていません。他の役についても、諸田地区外からの協力も得て行っています。

諸田の御田植祭は、こつけない所作など、演劇的な要素が多く取り入れられているのが特徴です。子どもたちから慣れている演者は、即興でもしろい動きをして観客を笑わせたりもします。

諸田山神社の御田植祭は平成13年4月3日に大分県の無形民俗文化財に指定されました。毎年春分の日午後1時から行われています。

御田植祭の諸役

田神主（たかぬし） 1名

御田植祭を神に奉告し、五穀成就を祈願する役目です。



祈願する田神主

作庄屋（さくじょうや） 1名

御田植祭を取り仕切る役目です。紋付・羽織・袴を着て、中折れ帽子をかぶり、腰に刀を差しています。



作庄屋

鍬取り（くわとり） 2名

神田のあぜ塗り・整地をする役目です。白装束に、赤のタスキをかけ、腰みの巻ぎ、大きなワラ草履をはいています。畔元の切り返し、土の踏み練り、水口の高さの調整など、昔の農作業の様子を細かく演じます。



鍬取り

馬鍬駄（もうがた） 1名・牛 2名

馬鍬駄は馬鍬を牛にひかせて代掻きをする役です。代掻きは田に水を張り、土を細かく砕いて丁寧な掻き混ぜ、土の表面を平らにして苗をむらなく育てるための作業です。暴れる牛をなだめながら神田を掻いていきます。諸田地区では昭和40年ごろまで農作業に牛を使っており、水田で暴れだす光景がよく見られたそうです。



駄使いと牛

出演者の服装

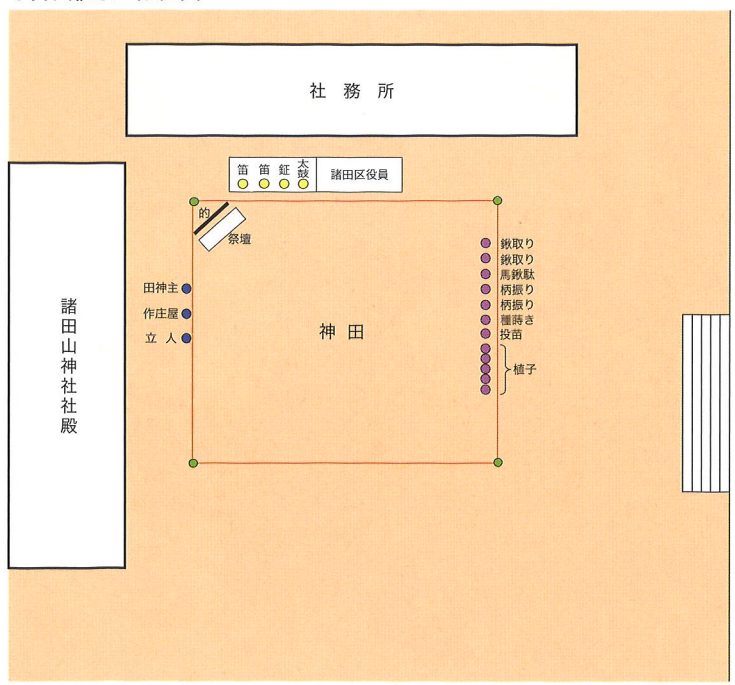
出演者はそれぞれの役にあわせて、羽織・袴や白装束を着たり、早乙女や花嫁に扮したりします。服装もさることながら、顔にユニークな化粧を施すのが諸田の御田植祭の特徴の一つです。作庄屋であれば立派な眉毛とヒゲを書き、農作業をする鍬取り・馬鍬駄・柄振り押し・種蒔き・投苗の各役は顔を白く塗った上に墨や紅・緑のカラフルな顔料で化粧します。こうして二目で吹き出すような姿でこつけない動作を演じ、観客を笑いの渦に巻き込みます。

鳥居



諸田地区では大正時代から昭和の初めのころ、大衆演劇の一座があつて盛んに興行していました。山神社でも昭和の初めまで、夏祭りの時に柴打ちや毛槍練りなどの行列が出ていたと伝わっており、芸能が盛んな地域だったようです。御田植祭に喜劇的な要素が含まれているのも、このような土地柄が関係するのではないかとされています。

○御田植祭の配置図



柄振り押し（えぶりおし） 2名

「柄振り」という、長い柄の先に横板のついた農具で田をならす役目です。



柄振り押し

種蒔き（たねまき） 1名

種蒔を苗代田にまく役目です。川につけてあつた種蒔は水を吸つて重く、担ぎ上げようとして何回も振り落してしまふ様子をユーモラスに演じます。



種蒔き



投苗

投苗（とうなえ） 1名

苗代田から神田まで、苗の入った籠を天秤で担いで運びます。

立人（たちうど） 1名

田植えの時に植子と掛け合いで歌い、太鼓で拍子をとります。

植子（つえこ） 5名

苗を植える役です。男の子が早乙女に扮します。着物に赤いタスキをかけ、菅笠を

かぶり、化粧をしています。田植えでは神田の中央に並んだ立人・田神主・作庄屋と向かい合つて横二列に並び、立人との掛け合いで御田植の唄を歌いながら苗を植えていきます。



植子役の男子たち

ウナリ 1名

弁当を持つてくる若嫁（妊娠）の役です。丸髻のカツラに白化粧、黒の留袖姿で登場します。最後に出産という形でその年の子宝を占い、御田植祭をしめくります。



ウナリ役の男性

神楽 1名
御田植祭の前に社殿で行われる神事で神楽を舞います。

里楽（りがく） 太鼓1名・笛2名・鉦1名
神楽や行列でお囃子を行います。

道具世話人 2名

小道具や衣装の出し入れ、手入れをする裏方です。

諸田山神社御田植祭の次第

※時間は目安ですが、1の祭典から12のウナリまでおよそ2時間30分かかります。

- 1 午後1時～
祭典
山神社の社殿で神事が行われます。理楽^{り がく}がお囃子^{はやし}を奏し、神楽^{かぐら}が奉納されます。
- 2 午後2時～
行列
太鼓と笛の理楽を先頭に御田植祭の行列が山神社へ向かいます。
- 3 的打ち
神田の片隅^{まど}に的が置かれ、神職・区長・総代などが弓で天地と的の中心に向けて矢を射ます。
- 4 かみうたい
神謡
田神主^{た かんぬし}が的の前で神謡を唱え、矢を射ます。
続いて御田植祭の諸役が次々と矢を射ます。
- 5 くわと
鋤取り
2人の鋤取りが神田の四隅を鋤で打ち、畔^{あぜ}を塗る所作^{こつげい}を滑稽に演じます。
- 6 しろ か
代掻き
馬鋤駄^{もうがた}が暴れる牛を連れ、神田を掻いていきます。
牛役は暴れながら、竹笛で鳴き声を発します。
- 7 え ぶ
柄振り
2人の柄振り^{えぶり お}押しが田をならします。
- 8 たね ま
種蒔き
老人^{たねもみ}が種^{ななし}を苗代田に運びます。背中に担ぎ上げようとしてうまいかず、何回も振り落してしまいます。
- 9 どうなえ
投苗
苗の入った重たい籠^{かご}を何度もつんのめったりひっくり返ったりしながら天秤^{てんびん}で担いで運びます。
- 10 たまわ
田廻り
田植えに先立ち、作庄屋^{さくじょう や}が神田を見回ります。
- 11 た う え
田植
5人の植子^{うえ こ}が、立人と掛け合いで御田植の唄を唄いながら苗を植える所作をします。
- 12 ウナリ
ご飯を運んできたウナリ(妊婦)が登場し、神前で突然産気づきます。ウナリが着物の下から布をだすと出産です。
布には白と赤があり、白い布なら男の子が、赤い布なら女の子がその年に多く生まれるとされています。



的打ち



代掻き



種蒔き



田植



ウナリ



お問い合わせ

国東市伝統文化活性化実行委員会

事務局：国東市教育委員会 文化財課

〒873-0504 大分県国東市国東町安国寺 1639-2

国東市歴史体験学習館内

TEL：0978-72-2677

FAX：0978-72-2505

祭りの参拝についての注意

祭りには、学術的な調査や記録以外、一般には公開されていない部分もあります。個人宅や屋内等で行われる非公開の行事には、関係者のみで行われる神聖な神事や住民のプライバシーに関する事柄も含まれています。祭りの伝統やしきたりを尊重し、迷惑をかけることのないようにしましょう。また、神社境内での公開行事では、マナーを守って写真撮影等を行い、祭りの関係者や参拝者に迷惑をかけることのないようにしましょう。